

京極読書新聞 <第62号>

発行日 平成26年11月1日(土)
京極町生涯学習センター湧学館

胆振国虻田をたずねるバスの旅

<後志文学散歩 2014>



後志の文学講座なのに、なぜか今年は「胆振」。多少面食らった方もいらっしゃると思います。でも、これが、今年度の「山麓文学館2」を続けてきた私たちの率直な想いなのです。ここ京極に暮らしていると、今まで語られてきた岩内や倶知安からの文化の流れとは別に、<南>からの文化や伝統の流入を感じざるを得ないのです。

たとえば「京極農場」。京極町の歴史は、明治30年、京極高德が胆振国虻田村のワッカタサップ地域に「京極農場」を拓いたことに端を発しますが、その開拓には洞爺村からの農業指導団が導入されました。その指導団の中の一人に藤村徳治がいます。彼は日高アイヌの言い伝え「ワッカタサップ川の上流には鉱泉が吹き出している」を確かめに上流を遡ります。そして、ついに鉄鉱石鉱床の大発見に至ったのです。脇方から鉄が出た… このことが京極町（あるいは後志）の歴史を大きく変えて行きます。大資本が入り、鉄道が敷かれ、人が集まってきます。神社ができ、学校ができ、病院ができ、人口7千人の町が形成されていったのです。まだ、北海道の鉄道が稚内や根室にとどいていない大正時代に、汽車が町を走っていて当たり前の行政が動き出していたのです。

そんな「京極」のルーツを求めて、まずは胆振国洞爺村へ。10月11日土曜日の午前9時、バスは出発です。（湧学館／新谷保人）



▲長万部 平和祈念館

1. 洞爺湖/武四郎坂～浮見堂～洞爺湖芸術館

湖(洞爺)に向って峠を下る。一同むしろを尻にしていり上りおたので、あつという間に洞爺湖畔についてしまった、とはいうもの、一つ間違うと谷底に、辻(すべ)り込んでしまうので非常に危険で、私はアイヌ達の辻る跡について下りたのである。

(松浦武四郎「後方羊蹄日誌」)



うしろ尻道から洞爺湖

▲ 松浦武四郎が描いた140年前の洞爺湖

裏洞爺に降りて行く途中の、現在「武四郎坂」の表示が出ている坂道。あれは正しい「武四郎坂」ではありません。本人が述べているとおり、むしろを櫓代わりに使って湖畔へ一気にすべり降りて行くのが正しい「武四郎坂」です。その雰囲気近づきたくて、今回は洞爺温泉病院の通用路を通らせていただきました。

朝の洞爺湖畔を散策し、洞爺湖芸術館へ。合併前は洞爺村役場だった建物には、写真家・並河萬里や彫刻家・砂澤ビッキの作品が巧みに配置されています。でも、やはり圧巻は洞爺村国際彫刻ビエンナーレの現代彫刻作品群でしょう。窓から一望の洞爺湖大パノラマを背景に、作品群がきらきらと立ち並んでいる様が夢のよう。洞爺湖は湖畔一周に58基もの現代日本を代表する彫刻家の作品が配置されていることでも有名ですが、なにか、この洞爺湖芸術館は、その洞爺湖全体の「扇の要」みたいな役割を果たしているようにも思えました。

2. 豊浦/カムイチャシ公園～文学碑公園～礼文華

長流川の岸辺の小山(タツコフ)の、山の陰を利用して野宿、夜アイヌたちにも酒をふるまう。一同たき火を囲み、やがてアイヌのサイモンというのが、ユーカラを唄い出したので、みんなで囃したり、拍子をとったりして、あまり面白かったので、水雪の上にながら一晩中寒いとも感じないで夜が明けてしまった。

(松浦武四郎「後方羊蹄日誌」)

松浦武四郎が寒さも忘れて見入った光景。その「ユーカラ」。アイヌの人たちの口承文芸「ユーカラ」を日本で初めて日本語に翻訳した知里幸恵の、

はかなくも強いその生涯を紹介できたことが(個人的には)今回の「バスの旅」いちばんの収穫でした。普段は、「後志の文学講座」という縛りがありますので、なかなか知里幸恵やイザベラ・バード、あるいは森竹竹市や掛川源一郎を語る機会もないのですが、今回は「胆振国」ということなのでラインナップを大胆に入れ替えることができ大変おもしろかったです。こういう試みは、私たちの「後志」イメージを大きく拡張させてくれるのではないのでしょうか。



▲ 知里幸恵と岩波文庫版「アイヌ神謡集」

文学碑公園に到着。この後、バスは「14トン車以上通行禁止」の表示が出ている礼文華海岸の巨岩の中を突っ切りました。

イザベラ・バードの「日本奥地紀行」に描かれた136年前の礼文華(れぶんげ)。掛川源一郎の写真集「gen」に残った礼文華の陶文太郎さん一家。小鉾岸(おふけし)にあったという金鉾山の話。あるいは、マンガ「鉄子の旅」で話題になった「小幌駅」。そして、帝銀事件の平沢貞通までが話題にからんできて、本当に、礼文華を通る時は時間が足りません。



◀ 平沢貞通
「礼文華風景」

そんなあれこれ話している内に、バスは長万部に到着。駅弁「かにめし」の老舗「かなや」で昼食をいただきました。

3. 長万部/平和祈念館～郷土資料室・鉄道村

洞爺湖畔の彫刻家58人の作品を見てまわっていると、ある不思議なことに気がつきます。あれ、あの人がいない… そうなんです。あの人、本郷新の作品が湖畔にないのです。

本郷新という名前を知らなくても、その作品を見ればすぐわかります。札幌・大通公園の「泉の像」。札幌駅前「牧歌の像」。函館・釧路の「石

川啄木像」。北海道の人で本郷新の作品を知らないという人はなかなかいないのではないのでしょうか。そんな大御所の作品が洞爺湖にないのは残念だけど、でも大丈夫。こっちにあるんです。それも、なんと5基も！「わだつみのこえ」、「鳥を抱く女」、「鳥の碑」、「北の母子像」、そして「嵐の中の母子像」。いやー、じつに壮観。本家の本郷新記念札幌彫刻美術館を除けば、これほどの規模で本郷新作品が集まっている例を他に知りません。

長万部町で長年開業医を務めていた工藤豊吉氏。彼の平和に関するコレクションが平和祈念館の建物とともに長万部町にプレゼントされました。その、祈念館内部ももの凄いコレクションの山です。中国古代の仏像から現代の谷川俊太郎の詩まで、ありとあらゆる平和を祈願する品々が集められています。その中には、

次いでカムイチセモシリ(神堂島)は周りが八町あって、中に一つの小さな御堂が建っている。これは寛文年間(一六六一～七三)に、美濃の国竹ヶ鼻の僧、円空という方が日本各地の高山を巡り、鉈(なた)一丁をいつも持っていて仏像を刻まれたという。その後円空はえぞ地に渡り、太田山、島牧、磯谷、夕張、恵庭、樽前、山越内等の地で仏像を作って御堂に納められたが、後にこの島に何年か住まわれたそうである。その間に観音像を二体作って、一体は礼文華の石の洞穴に、もう一体をこの島に安置されたのである。

(松浦武四郎「後方羊蹄日誌」)

もちろん、その円空仏もありました。

4. 豊浦/新山梨小学校・開拓十年碑

「京極」という町を特徴づける要因が二つあります。一つは、先ほどお話しした「脇方の鉄鉱石」。そして、もう一つがこの「山梨団体」ではないかと思えます。

明治41年、山梨県・笛吹川の洪水氾濫に毎年のように悩まされていた農民たちはついに山梨での農作をあきらめ、北海道・羊蹄山麓への集団移住を決意したのです。山梨県が積極的に音頭をとった3～4千人規模の大移住ではありました。

移住先には、倶知安村のヌプリカンベツ(現在の倶知安町山梨)、パーペナイ(現在の京極町甲斐)、ワッカタサップ(現在の京極町脇方)や弁辺村のソータキベツ(現在の豊浦町山梨)、弁辺原野(現在の豊浦町新山梨)などが選ばれています。

羊蹄山をぐるっと取り囲むかのように200～300戸といった規模の大団体が倶知安村や弁辺村



◀ 豊浦町・旧山梨小学校に残る「富士山ー羊蹄山」ステンドグラス

に入ってきたのです。京極町の場合は、この大きな人口流入が引き金となって、倶知安村からの「東倶知安村(京極町の旧名です)」独立という事態が起こっています。もしこの人口大爆発がなかったら、今でも京極町は倶知安町の一部であったかもしれない。かように、京極町の発端に「山梨団体」は深くかかわっているのです。

今回、豊浦町(旧名・弁辺村)の新山梨地域をたずねたのはわけがあります。その新山梨小学校跡地には「山梨移住民団開拓十年記念碑」(大正7年建立)があったからなのでした。じつは、同じ「十年碑」が京極町・甲斐(大正6年建立)にもあります。どちらも山梨団体最古の記念碑と言えますが、京極町の「十年碑」の存在を知る人は今極端に少ない。(甲斐という町名だって「それ、どこにあるの?」という人が多いと思います)

ひとつには、入植に入った土地がひどい山間の傾斜地であったこと。山梨での農作をあきらめた人たちは、ここ北海道の羊蹄山麓までやって来て、もう一度農業をあきらめなければならなかったのです。悲しい話です。

豊浦町(弁辺村)のケースは、その逆のケースと言えましょう。開拓十年の時を越えて現在にまで人が残ったのです。過疎で山梨、新山梨小学校ともども数年前に廃校になってしまいましたが、でも、神社や公民館といった町の機能はまだ残っている。まだ人がいる。まだ、そこには、山梨団体が持ち込んだ甲斐四百年の文化が今に息づいているのです。とても興味深い。パーペナイやワッカタサップに入った人たちの面影が、じつは虻田郡豊浦町に残っていたということがこれからもあるかもしれませんね。



▲ 新山梨小学校跡の移住十年碑

* 2014年11月1日 *

湧学館は 開館10年を迎えました!

平成16年(2004年)11月1日に開館し、今年7月には全体の入館者数が30万人を超えました。これからも湧学館をよろしくお願いたします。



10周年記念事業・イベント続々と進行中です



湧学館まつり



10年のあゆみ写真展



ファイターズ展



水曜連続上映会



京中壁新聞作品展

今後の予定

11/28(金)柳家三之助 落語独演会
12/11(木)津軽民謡コンサート
イベントの詳細は、広報やホームページなどでお知らせします。

<開館10周年記念企画>

湧学館を利用してオリジナルグッズを手に入れよう!



◎図書館の利用(図書雑誌等の貸出/AV視聴/PC利用)でポイントカードにスタンプを押させていただきます。(1日1つまで)ポイントがたまると湧学館オリジナルグッズをプレゼント!たくさんのご利用お待ちしております♪

実施期間: 2014年11月1日(土)~2015年3月31日(火)

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

京極読書新聞は 毎月1日発行です。

